

令和4年度第31回市政懇談会 会議録（要旨）

テーマ：1) 障がい児支援について
2) 子どものひきこもり（教育と福祉の連携）について

【日 時】 令和5年2月24日（金） 18時25分 ～ 19時40分
【出席者】 ○篠崎市長 ○参加者（13名） むべの里光荣理事長 うべつくし園職員 ○健康福祉部部長・次長 ○障害福祉課課長・副課長 ○こども支援課副課長 ○教育支援課課長・副課長 ○事務局（広報広聴課）
【概 要】 1 施設紹介 2 開会 3 市長あいさつ 4 参加者自己紹介 5 意見交換・懇談 6 閉会
【意見交換・懇談】 【うべつくし園 児童発達支援係長】 ・医療、福祉、教育の連携が不足している。以前は、こどもリハビリ室（旧うべつくし園横の旧岬小学校分室、市が実施）から理学療法士2名の派遣があり、専門的なアドバイスをいただき連携もできていた。連携ができる環境を整えることが障がい児支援につながると思う。 ・施設の空きがなく、必要なリハビリが受けられず、リハビリの間隔が空いてしまっている。こどもリハビリ室は、理学療法士が常駐していたので密な連携が可能であったが、今は施設に連絡して見学に行っている。リハビリの回数が少なく、連携が取りにくい状況になっている。 ・児童発達支援センターの強みを活かして、地域の幼稚園、保育園と連携を深めていきたい。職員の交流を行い、専門的な知識を学ぶような仕組みがあるといいと思う。 【健康福祉部長】 ・医療現場からも、連携についての要望がある。まずはソフト面での連携からスタートしていく。今後、子どもの支援に特化した専門部会を作り、意見をしっかりいただいて進めていく。

【市長】

- ・理学療法士会から「理学療法士が、各施設を訪問し支援するプログラム」について提案を受けている。どこまでの支援が可能か明確ではないが、こういった方々と連携していくのもいいと思う。
- ・関係機関の連携ができないと、子どもや家族への支援はできない。様々な困難を抱える子どもたちが増えている中で、来年度、スクールソーシャルワーカーの人数を増やし、対応をしていく。
- ・行政に相談に行くこと自体、敷居が高いとの意見をいただいている。行政以外にも相談できる場所があることを周知し、社会全体で障害児支援につなげていきたい。
- ・保育園職員との人材交流は、検討していきたい。

【うべつくし園 児童発達支援係長】

- ・保育所等訪問支援で学校に訪問することがあるが、学校との壁を感じ、対等の話が難しい。うまく連携できると、子ども達がスムーズに学校生活を送ることができると感じている。
- ・学童の先生から、入学前に新1年生を学童でお預かりするため、学校の先生と連携をしていきたいとの話を聞く。幼稚園や保育園からの情報が学童に届かない。コロナ禍で面談もできない。幼稚園や保育園から学校への引継がれた情報は、特に支援が必要な子どもの支援には必要だと思う。現状は、個人情報として教えてもらえない。
- ・お子さんが就学するとき、幼稚園、保育園、学校、学童で集まる場ができれば良い。前向きに検討してほしい。
- ・ひきこもりや不登校の直接的な原因かどうかは分からないが、周りの様子を伺いながら行動する子どもが多い。結局、自分の意見が言えず、つらくなって孤立し、その延長線上で学校に行きたくなくなるのではないかな。

【市長】

- ・困難を抱えている子どもが増えており、学校の先生は現場で手一杯な状況もある。小学校は教育機関として勉強を教える場であり、福祉は別と考えられている部分もあるが、その課題に対しては、スクールソーシャルワーカーに間に入ってもらう方法もある。
- ・学童と学校の連携ができていない、個人情報が届かないというのは、大きな問題である。学童と事前に相談できるような仕組みづくりができないか。特に支援が必要な子どもに関しては、相談ができるような体制を考えていく必要がある。
- ・ひきこもりや不登校に関しては、しっかり対応していく。コロナ禍で不登校の子どもも増えており、市でも8050問題が大きな課題となっている。ひきこもり本人や、その周りの方々を支援するために、山口大学と連携してひきこもりの子どもが社会に少しずつ戻ってこられるような体制を作っていく。今年度から、専門の職員の力だけでなく、地域で理解者を増やしていくプログラムを実施し、それらを活用しながらサポート体制を厚くしていく。

【健康福祉部長】

- ・以前、気になる子どもについて、月に1回、市職員・福祉関係者・ソーシャルワーカー・校長が集まり、事例検討のようなことをやっていた。学校でこれだけ丁寧なことは難しいかもしれないが、様々な方が寄り添う支援ができればいいと感じた。

【放課後等デイサービス 児童発達支援管理責任者】

- ・総合支援学校に行けない1年生のお子さんをお預かりしている。しっかりとここでお子さんの発達を支えていこうということになっている。学校の学習課題に取り組んでいるが、学習面の支援は当施設では限界があり、例えば先生が月に1回来て教えていただくとか、総合支援学校の訪問学級のような形で、先生が放課後等デイサービスに来ていただくことができないか。

【市長】

- ・行政は子ども達に学びを保障する必要がある、子どもにあった状況で学ぶ環境を提供しなければいけない。例えば、今年度からフリースクールに通う子どもに、県内初で補助金を出している。
- ・それぞれの子どもの状況に応じた個別の仕組みづくりが大事である。個別のプラン作成には連携が必要なため、まずは個々の対応ができるような相談支援体制を作りたい。通学が難しいと感じている子どもには、新しいツールで、ひとり一台端末を活用し、勉強する方法もある。
- ・教育委員会からの教員派遣や、OB教員を派遣して福祉施設を回る等、福祉と教育で連携できる仕組みを構築し、子どもの教育を支援する方法を検討していく。それぞれの子どもにどこまでの学びが必要なのか、そのあたりをふまえて仕組みを構築していく必要がある。

【教育支援課長】

- ・どこまでの学びが必要かというところは、支援が必要な子どもだけではなくて、通常のクラスにいる子どもにも言えることで、学校の現場としても非常に悩んでいるところと思う。
- ・不登校に関しても、どこまで支援ができるのか。学びの場に出てくるだけでもいいのか。きちんと学習として、何かを学んでいかないといけないのか。
- ・教育委員会として目指しているのは、子どもたちが健やかに成長して社会的に自立していくこと。そこが一番大きな目標だと思うので、どこまで学びが必要か判断していくのは難しい問題だと考えている。

【生活介護 サービス管理責任者】

- ・保護者が抱えている共通の悩みは、親亡き後の子どもの過ごし方である。重症心身障害者なら入所施設一択で、入所施設も入所の待機登録後、順番がいつ回ってくるのか分からない。ある日突然、来週から入所と連絡がくる。親は身を引き裂かれる思いで我が子を預ける。重度の方が入所できるグループホームも全国的にはできているが、

まだまだ少ない。保護者と一緒に入れるホームがあったらいいと思う。家族ごと住めるような施設があったら心の準備は必要ないし、職員とも交流しながら世話の仕方など共有できる。今の制度だと、本人のみを支援するサービスしかないので、家族ぐるみでケアしていけるような制度を希望している。

【市長】

- ・以前、施設の方から、「親御さんがお元気なうちに子どもを預けておかないと、ある日急に親御さんが亡くなってお子さんが施設に入っても、その施設生活に耐えられるかどうか心配である」ということを聞いたことがある。一方で、施設は入所者が亡くなったりしたときに急きょ部屋が空くというケースが非常に多い。突然入居の連絡があり、来週から子どもと離れ離れ、親御さん達の負担の大きさは理解できる。
- ・広島県因島市では、地元の医師会病院が、障害者ではなくて高齢者であるが、普段は施設に預け、家族が来たときには一緒に過ごせるような部屋を準備している。
- ・急に施設に入ることになったとしても、最初のうちは、週に半分くらいは家族と暮らせるような場所があるといいと考えるが、一方で社会的な制度も必要になってくる。ある日突然、子どもと引き裂かれるような状況になるのは、望ましいことではないと思うので、現場の方と意見交換をしながら、家族とも暮らせるような施設を作る仕組みを検討していく。

【むべの里光栄理事長】

- ・うべつくし園が50年を迎え、障害と認定された子どものみを支援する場ではなくて、うべつくし園で培った専門的な部分は強みとして残しながらも、親御さんがフランクに子どもの相談ができる事業所になれたらいいと思っている。

【市長】

- ・価値観が多様化しており、ひとつの課題をクリアしていくことで、多くの人たちが救われることもたくさんあるので、遠慮なく意見を言っていただければと思う。できることできないこともあるが、考えていくこと、進めていくことが大事であると思っている。
- ・近々、宇部市インクルーシブ遊具がオープンする。障害の有無に関わらず遊べる場所であり、是非とも積極的にご利用いただき、課題があればどんどん言ってほしい。